

美術科教育学会通信 No.121 2026年2月20日

□巻頭言 □第48回東京大会案内(最終案内) □第48回東京大会案内(研究発表一覧) □2025年度リサーチフォーラム報告 □書評 □本部事務局より

巻頭言 Introduction

第13期 総務部が発足 / 開かれた学会運営 Launch of the 13th General Affairs Department Open Academic Society Management

副代表理事 竹内晋平 (奈良教育大学)

Deputy Director : Shimpei TAKEUCHI, Nara University of Education



1. 第13期の総務部をよろしくお願ひします

理事改選を経て2025年4月より、第13期の総務部が発足いたしました。私、総務部を担当させていただいている竹内晋平です。私を含めた5名の理事が本務と並行しながら会計管理・会員管理・Web管理・学会通信編集などの仕事を分担させていただいております。簡単ですが、総務部の理事を紹介させていただきます。

学会の会計をご担当いただいているのは、内田裕子理事です。日々、総務部には数多くの請求書や振込依頼が寄せられます。それに対して、学会の活動が滞ることがないように、細やかかつスピーディーに決済を進めるとともに資金管理を担っていただいています。

また、会員管理は渡邊美香理事にご担当いただいています。本学会には600名を超える会員の皆様が在籍されています。会員の皆さまの動向を把握するとともに、国内外からの入会の手続きにもリアルタイムで対応いただいています。

そして、学会Webサイトの管理は手塚千尋理事にご担当いただいています。頻りに学会の内外から寄せられる最新情報をすみやかにWebサイトに掲載・公開していただくとともに、海外会員に配慮した情報発信にもご尽力いただいています。

年に3回刊行される『学会通信』の企画から原稿のとりまとめまで、緻密な編集作業をご担当いただいているのは佐藤絵里子理事です。会員の皆さまを相互につながり大切なメディアである『学会通信』の充実に日々、ご尽力いただいています。

2028年3月までの3年間、今期の総務部をどうぞよろしくお願ひいたします。

2. 学会運営に関する議論の重要性

総務部の立場から学会運営に携わせていただいていると、やはり会員数の動向、財政面での学会運営に関する現状に着目する機会が多くなりました。学会としての活動に不可欠な様々な物品やサービスの価格上昇は、学会の会計への影響も大きなものがあります。このような物価上昇の積み重ねが、学会の支出を少しずつ押し上げています。総務部としては学会の学術的水準と会員の皆さまの利益を担保しながら、どのようにして財政の健全性を維持するのかが議論する必要があると考えています。

学会運営に関する議論を交わす場は、理事会と総会になります。理事会での審議・報告内容については、『学会通信』(6月・10月刊行分)に掲載されています。そして大会に付帯して開催される総会(3月)は、会員の皆さまが議論にご参画いただくことができる場であり、本学会の「最高議決機関」(会則第15条)です。

対面で開催される2025年度総会(2026年3月14日(土)・13:20-14:00, 早稲田大学・早稲田キャンパス)では、会員の皆さまと現在の課題を共有し、持続可能で開かれた学会のあり方を議論したいと考えております。そして、もし総会への参加が困難な場合には委任状の提出をお願いいたします(2024年度より、総会委任状の提出方法は電子提出に移行しました)。

3. 委任状の電子提出について

総会を欠席される場合は次ページをご参照いただき、委任状の提出方法をご確認ください(提出可能期間は、2026年2月20日(金)10時～3月6日(金)17時)。

【 総会委任状の提出方法 (出席の場合は提出不要!) 】

- ① 会員 ID とパスワードをご準備いただき、下記のリンクからログインをお願いします。
<https://service.gakkai.ne.jp/society-member/auth/survey/AAE>
- ② 調査名として「2025 年度総会委任状」をご選択ください。
- ③ 「ご欠席」にチェックを入れます。
- ④ 代理人として「代表理事」または「その他」をご選択ください。
- ⑤ 「その他」を選択された場合は「代理人氏名」をご記入ください。
- ⑥ 「送信内容の確認」, 「送信」へとお進みください。

第48回東京（早稲田）大会案内（最終案内）

Final Notice of the 48th Conference in Tokyo (Waseda)

第48回美術科教育学会東京（早稲田）大会

大会実行委員長 大泉 義一（早稲田大学） 事務局長 畑山 未央（植草学園大学）

大会テーマ「美術教育と未来」

- 会 期 2026（令和8）年3月14日（土）、15日（日）
- 懇親会 2026（令和8）年3月14日（土）18：40～20：40 大隈ガーデンハウス2階（※定員150名）
- 会 場 早稲田大学 早稲田キャンパス（〒169-8050 新宿区西早稲田1-6-1）
- 後 援 国際美術教育学会 InSEA, 日本ユネスコ国内委員会, 東京都教育委員会, 新宿区教育委員会
- 共 催 早稲田大学 教育・総合科学学術院

寒暖差の激しい日が続いておりますが、皆様におかれましては、お健やかにお過ごしのこととお慶び申し上げます。都心・新宿区早稲田の地にも、街路樹の枝先に確かな春の兆しを感じられ、都市の景観にも華やかな彩りが添えられる頃となりました。こうした早春の気配のもと、全国からお集まりいただき皆様を迎え、本大会が研究交流と議論を深める実り多い機会となるよう、実行委員一同、鋭意準備を進めております。

本大会では、国内外の研究者・実践者による107件の口頭研究発表が予定されています。また、大会特別企画として、一般にも開かれた4つの無料プログラムも予定しております。発表を含めた事前申込者数も200名を超えております。定員150名の懇親会の申込もまだ受け付けております（早稲田の応援団が美術教育を応援します）。懇親会は、定員に達し次第申込を締め切りますので、どうぞお早めにお申し込みください。詳細は、東京（早稲田）大会 Web サイトをご覧くださいと幸いです。



大会 Web サイト



大会参加申込



会場周辺のランチマップ

大会 Web サイト URL : <https://sites.google.com/view/jaaedresearchconference48th/home?authuser=0>

■ 大会参加費・懇親会参加費

	大会参加費		懇親会費	
	事前申込み (11/1～3/7)	3/8以降の申込み (3/8～大会当日)	事前申込み (11/1～3/7)	3/8以降の申込み (3/8～大会当日)
支払い方法	Peatix	Peatix	Peatix	Peatix
正会員 ^{※1}	4,500円	5,000円	6,000円	7,000円
会員以外（一般）	5,500円	6,000円	6,000円	7,000円
学生会員 ^{※2}	2,500円	3,000円	4,000円	5,000円

※1 「大学美術教育学会」または「日本美術教育学会」または「国際美術教育学会： International Society for Education through Art, InSEA」の会員は、本学会会員と同様に、正会員の料金で参加することができます。

※2 「学生会員」は、本学会に「学生会員」として登録済みの会員のことを指しています。なお「学生会員」に該当している方は、在職の有無は問わず、「学生会員」の料金でご参加いただけます。それ以外の学部生・大学院生、聴講生、研究生、科目等履修生は「正会員」「会員以外（一般）」のどちらか該当する方となります。

※事前申込期間は3月7日（土）までです。多くの方のご参加をお待ちしております。

■ 大会特別企画の参加について

(1) 大会特別企画の概要

本大会では、早稲田大学 教育・総合科学学術院の共催にて、一般無料公開の企画を4つ予定しております。いずれの企画も、本大会への参加に関わらず、どなたでも無料でご参加いただけます。

【大会1日目】

- ①「造形遊びを再定位する～歴史・現場・展望の三層から～リサーチフォーラム in 東京・成城を起点に」(11:20～12:20, 14号館101教室)
- ②第3回 国際研究セミナー「文化と芸術教育の統合的発展 (通訳付)」(14:10～16:40, 14号館201教室)

【大会2日目】

- ③「全日本美術教育会議」(9:30～12:00, 小野記念講堂) ※定員200名 (入場者先着順)。
- ④「メディアアーティスト×高校生=未来」(14:00～16:00, 14号館604教室)

(2) 申込方法

大会特別企画のみに参加希望の方は、大会 Web サイトに記載の「大会企画専用の Peatix」よりお申込をお願いします。なお、この Peatix は、「大会企画だけに参加する方専用」です。本大会（口頭研究発表を含む有料のプログラム）に参加される方々はお申込不要です。

■ 口頭研究発表者の皆様へ

(1) 発表資格

発表に際し、筆頭発表者は本学会会員（申し込み時点で、当該年度までの会費を完納している）であることが参加条件です。共同研究の場合は、筆頭発表者が会員であれば、そのほかに何名でも発表資格を有する共同研究者として認められます。なお、発表者は全員、参加登録と参加費納入が必要です。

(2) 発表時間

発表20分、質疑10分の計30分です。司会の進行に従い、時間厳守のご協力をお願いします。なお、各研究発表の日時、会場については次頁と大会 Web サイトにてお知らせいたします。

(3) 使用機器

発表でパソコンやタブレット等を使用する場合は、各自で持参してください。プロジェクターへの接続は HDMI が基本となります。Mac, iPad 等の接続は各自変換アダプターを用意してください。配布物を持参される方は、会場入口付近の机に置いてください。

■ 参加者の皆様へ

(1) 名札の着用をお願い

参加者の皆様には、名札をお渡しいたします。有料参加者と無料参加者を名札で判断いたしますので、会場内では必ずご着用をお願いします。

(2) 手荷物の管理について

本大会ではクローク等、お荷物をお預かりする場所はございません。ご自身で管理をお願いいたします。（最寄り駅の早稲田駅や高田馬場駅などのコインロッカーもご利用ください。）

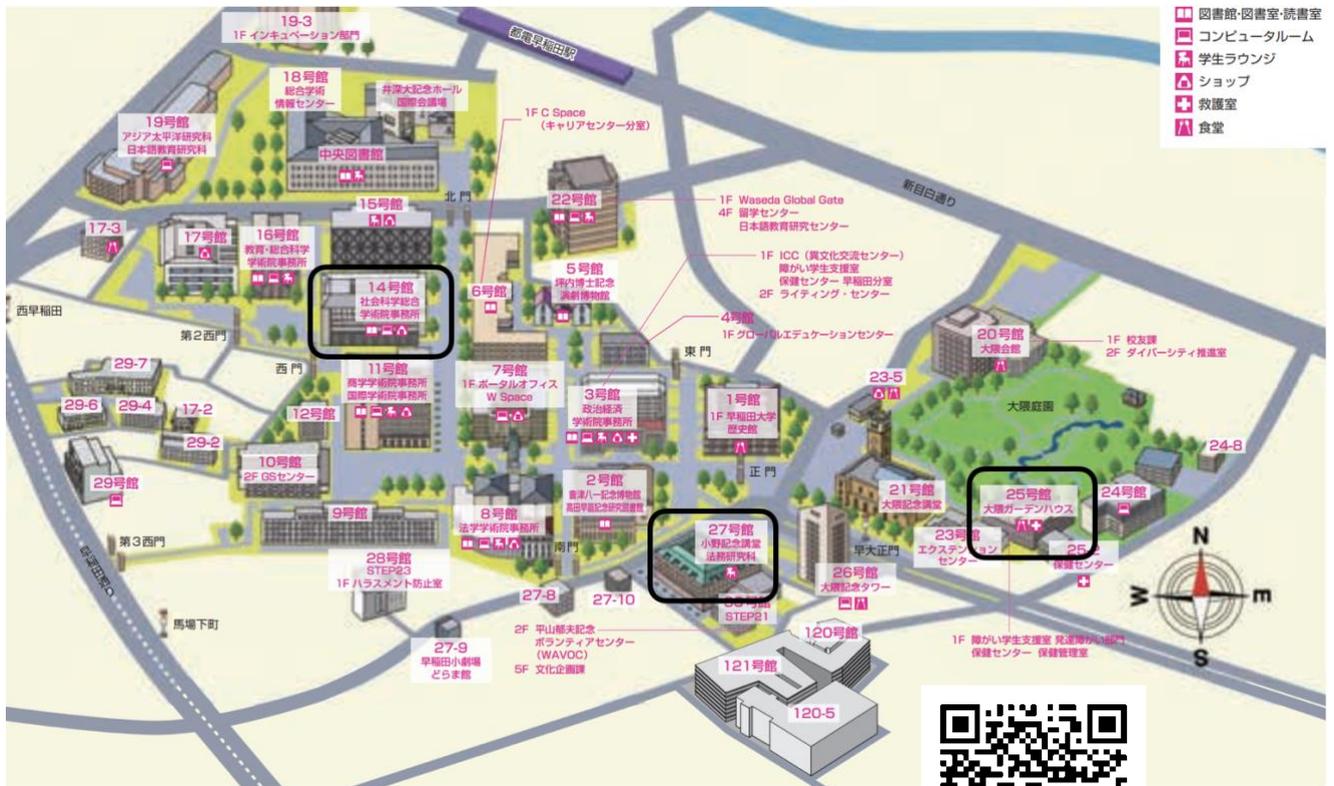
■ 会場までのアクセス

- ・JR 山手線および西武新宿線 高田馬場駅から徒歩20分
- ・東京メトロ 東西線 早稲田駅から徒歩8分
- ・都バス 学02 (学バス) 高田馬場駅 - 早大正門 など

詳細は、早稲田大学ホームページ、東京 (早稲田) 大会 Web サイト等でご確認ください。

■ 会場と Wi-Fi 環境について

1日目及び2日目午後の会場は主に「14号館」です。受付は14号館エントランスロビー（1階）で行います。2日目午前は「27号館 小野記念講堂」が会場となり、懇親会は1日目に「25号館 大隈ガーデンハウス」で開催します。これら早稲田大学キャンパス内では、Wi-Fiを使用できます。当日受付でIDとパスワードを発行予定です。ただし大勢の方がつなぐとネットワークが不安定になりやすいため、安定したWi-Fi環境が必要な方はご自身で機器をご持参ください。



※早稲田大学ホームページのキャンパス案内もご覧ください。



14号館



小野梓記念館 (小野記念講堂)



大隈ガーデンハウス

■ 宿泊に関して

宿泊施設の確保・斡旋は行っておりません。各自で早めのご予約をお願いいたします。早稲田大学へは、高田馬場駅のほか、新宿駅、池袋駅など、様々な駅からアクセス良好です。

■ 昼食について

今大会では、参加者用のお弁当の申込みは行いません。東京（早稲田）大会 Web サイトにて、早稲田大学近隣の飲食店マップを公開しています（前頁「会場周辺のランチマップ」QRコードをご覧ください）。ご参考のうへ、各自でご利用をお願いします。

■ 問い合わせ先

東京（早稲田）大会実行委員会事務局 jaaed1978@gmail.com
 大会実行委員長 大泉 義一（早稲田大学） Tel. 03-3208-1703
 事務局長 畑山 未央（植草学園大学） Tel. 043-233-9306



第48回東京(早稲田)大会案内(研究発表者及び発表演題一覧)

Final Notice of the 48th Conference in Tokyo (Waseda)

第48回美術科教育学会東京(早稲田)大会 実行委員会

【1日目】2026年3月14日(土) ※[EN]は英語発表
 午前《研究発表》 ★企業による出展(14号館4階):9:00～ ★14号館1階ロビー受付開始9:00

	A会場 14号館4階 401室	B会場 14号館4階 402室	C会場 14号館4階 403室	D会場 14号館4階 407室	E会場 14号館4階 408室
① 9:30 10:00	図画工作科授業における中動態としての学びの姿の見取りの検証—素材との対話と表現意図の変容に着目した行為の分析から— 木村 仁(滋賀大学教育学部附属小学校), 妹尾佑介(岡山県立玉島高等学校), 松浦 藍(岡山大学), 清田 哲男(岡山大学)	造形遊びの研究にとって理論とは何か 菊地虹(立教大学博士後期課程), 中川弘輝(東京学芸大学), 清家 颯(東京学芸大学)	図画工作科の学習指導要領の概念と教育課程に関する考察—造形的な見方・考え方と、知識及び技能、自分と他者に着目して— 辻 大地(大阪成蹊大学)	ARTを主軸としたSTEAMの実践Ⅳ～生命形態のメディア表現～ 渡邊 晃一(福島大学)	高校美術におけるA/r/tographyを応用した授業開発—「教える」から「共に創る」へ:授業者の振り返りと姿勢の変容— 廖曦 彤(山形大学), 草刈 江莉(山形県立新庄南高等学校)
② 10:05 10:35	「学びの扇」を用いた児童生徒の省察 妹尾佑介(岡山県立玉島高等学校), 大橋 功(和歌山信愛大学), 藤田 雅也(岡山大学), 松浦 藍(岡山大学), 木村 仁(滋賀大学教育学部附属小学校), 清田哲男(岡山大学)	「造形遊び」の省察における教師の意味生成—共同的解釈に関する分析— 佐藤 絵里子(弘前大学), 外崎 美佳(弘前大学教育学部附属小学校), 八嶋 孝幸(弘前大学教育学部附属小学校)	米国第三世代 DBAE におけるカリキュラム構造転換—認知的柔軟性理論と教科横断的ハブ構造に着目して— 南洋平(和歌山県立粉河高等学校/神戸大学大学院人間発達環境学研究所)	美術教材からみたアメリカ, スペインの STEAM 教育動向 藤井 康子(大分大学教育学部), 西口 宏泰(大分大学研究マネジメント機構)	「単純化・省略・強調」が中学生の構想にもたらす影響に関する実践的研究 —3 題材に基づく分析を手掛かりにして— 鎌田 純平(弘前大学教育学部附属中学校/東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士課程)
③ 10:40 11:10	図画工作科教育法の学修内容—芸術知に基づく方法的認識の対比から— 高橋 文子(東京未来大学)	子どもたちが概念を生成する学習活動としての「造形遊び」—小学校高学年を対象とした「造形遊び」の事例より— 村田 透(滋賀大学)	構成学におけるシュバヌンクと図案デザイン手法 大友 邦子(筑波大学 芸術系)	米国での STEAM 調査研究 1～RISD の《正統な STEAM》の現在～ 藤原 智也(愛知県立大学 教育福祉学部), 清田 哲男(岡山大学大学院 教育学研究科)	中学校美術科における伝統美術を活用した題材開発研究 II—修学旅行との連携による画像鑑賞の実践を通して— 竹内 晋平(奈良教育大学), 中川 知子(つくば市立高崎中学校)
④ 11:15 11:45	児童画に対する評価とフィードバックの特徴—テキストマイニングによる教員・学生の比較— 萩生田 伸子(埼玉大学教育学部), 有原 穂波(目白大学人間学部)	批評は美術教育学の方法たりうるか 清家颯(東京学芸大学), 北野 諒(高知大学), 在原 汰智(千葉県立佐倉高等学校)	美術教育学研究論文ワークショップ II 研究の内的論理と外部参照性, 学会誌掲載の経年的把握 金子 一夫(茨城大学名誉教授) 有田 洋子(鳥根大学)	米国での STEAM 調査研究 2～社会に根付く芸術の創造性～ 清田 哲男(岡山大学大学院 教育学研究科), 藤原 智也(愛知県立大学 教育福祉学部)	ゴッホの筆致に学び, 自分の「空」を描く授業実践—中学校美術科における油絵具の導入を通して— 廣川 豪(福島大学附属中学校)
⑤ 11:50 12:20	高等学校芸術科工芸への接続を踏まえた用具の扱いに関する自己評価の分析—中学校での学習に関する質問紙調査を基に— 高野 雄生(東京都立拝島高等学校)	デザイン思考に基づく児童の「創造性」に着目した描画活動指導:—詩教材「おと」を用いた高学年実践から— 有川 貴子(富山大学, 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科)		現代美術の学びを導入した STEAM 型アート実践の検討:大学生の制作における素材の拡張性に着目して 前沢 知子(共栄大学教育学部)	eポートフォリオを体験空間として再構成する試み — 中学校美術科における 3D ポートフォリオによる省察の深化 — 杉坂 洋嗣(東京学芸大学附属竹早中学校所属)
	F会場 14号館5階 501室	G会場 14号館5階 502室	H会場 14号館5階 514室	I会場 14号館5階 515室	大会企画会場 14号館1階 103室
① 9:30 10:00	日本におけるフォトメディア・リテラシー—探求に関する略説的報告 Gary McLeod(筑波大学) [EN]	アートセラピーと癒し:がま口手芸制作過程における心理的影響の検討 江學滢(国立台湾師範大学 美術学系) [EN]	AI 活用による美術教育の学習過程の変容と教師の役割—中国の実践事例からの考察— 伍翔南(日本女子大学)	空き	空き

② 10:05 10:35	探索から目標志向の反復へ:生成 AI (AIGC) を活用した大学院美術教育における創作課題の戦略的変容 郭俞霏 (国立高雄科技大学) [EN]	市民社会への芸術教育の統合:ヌイ・ブランシュにおける学生キュレーション実践の事例研究 林郁綾 (国立台湾師範大学美術研究科芸術教育専攻) [EN]	アニメーションにおける動きの表現探究ツールの開発③ 布山 タルト (東京藝術大学大学院映像研究科)	アーティスト・イン・スクールの単元化がもたらす学びの質的変容—活動理論による総合的な学習の時間の実践分析— 石田 絵里香 (関西大学大学院文学研究科 博士課程前期課程)	空き
③ 10:40 11:10	大学美術学科における女性学生の学習過程とキャリア発展に関する研究 韓沛潔 (国立台湾師範大学美術学科) [EN]	創造の正当性:創作形態の正当な保護に向けた導入講座の提唱 アリアン・ヴィンセント・ガレゴス (デ・ラ・サル大学 セント・ベニルデ校 フィリピン) [EN]	ピクセルのソニフィケーションを用いたアシッド・サウンド生成環境における音楽的色彩構成 具志堅 裕介 (山形大学)	ポスト・アートプロジェクトの実践モデルをめぐる一考察:《放課後の学校クラブ》の15年間を通して 市川 寛也 (群馬大学)	空き
④ 11:15 11:45	混沌の中の創造性:未来モデルが交差する地点における芸術教育—視覚/美術教師養成の経験を踏まえて ガブリエラ・パタキ (エトヴェシュ・ローランド大学・ハンガリー) [EN]	バイリンガル絵画教育:ロシア学派×日本伝統の統合モデル 中村 アレクサンドラ (東京ロシア写真絵画学校) [EN]	心理尺度を用いたにじみ絵の実践の検討—シュタイナー学校の美術教育を参照して— 吉田 奈穂子 (筑波大学芸術系), 菅原 大地 (筑波大学人間系)	中之条ビエンナーレ 2025 における「キッズアートパス」の実践 郡司 明子 (群馬大学), 市川 寛也 (群馬大学), 箱田 みどり (中之条ビエンナーレ事務局), 赤石 賢也 (群馬大学教職大学院), 目黒 浩志 (群馬大学教職大学院)	《大会企画》 造形遊びを再定位する—歴史・現場・展望の三層から— リサーチフォーラム in 東京・成城を起点に— 粟津 謙吾 (成城学園初等学校) 村田 透 (滋賀大学) 斉藤 洋介 (横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校) 河村 泰正 (練馬区立豊玉第二小学校) 清水 一成 (世田谷区立船橋小学校)
⑤ 11:50 12:20	教室からギャラリーへ、そして再び教室へ:将来の美術教師のための有意義な博物館統合の準備 チャラス・アグニェシュカ (シンガポール国立教育研究所) [EN]	アートグラファーとして生きること—芸術/研究/教育の間で文化的帰属を語る— 侯 雅晴 (モナシュ大学・オーストラリア), 廖 曦彤 (山形大学) [EN]	科研費基盤研究 B 2004→A 2007→A 2011~2014 年度の展開—「日本の美術教科書・美術教育文献資料のアーカイブ化に関する研究」2004~2006 を軸に 山口 喜雄 (元 宇都宮大学)	文化的実践に基づいた子どもの絵の新しい価値に関する一考察—子どもの絵ホームステイプロジェクトのインタビュー調査を通して— 松浦 藍 (岡山大学)	

【1日目】2026年3月14日(土)

12:20—13:20	昼休憩 ※各教室並びに参加者控室, 校舎内, キャンパス内で食事可能
12:20—13:20	論文投稿ランチカフェ 【14号館4F 401室】

【1日目】2026年3月14日(土) 午後

13:20~14:10	開会行事 / 総会	【14号館2F 201室】 〈大会企画〉 は一般公開 (無料)
14:10~16:40	〈大会企画〉第3回国際研究セミナー ※通訳付き 文化と芸術教育の統合的発展 ユネスコ・フレームワークによる未来戦略 講師: Ke Leng 氏 (ユネスコ・パリ本部) コメンテーター: 福本 謹一氏 (兵庫教育大学・名誉教授)	

【1日目】2026年3月14日(土) 《研究部会》

16:50 ~ 18:20	授業研究部会 【4F 401室】	美術教育史研究部会 【4F 402室】	造形カリキュラム 研究部会 【4F 403室】	乳・幼児 造形研究部会 【5F 501室】	インクルーシブ 美術教育研究部会 【5F 502室】
---------------------	---------------------	------------------------	-------------------------------	-----------------------------	----------------------------------

【1日目】2026年3月14日(土) 《懇親会》

大隈ガーデンハウス 2階	
18:40—20:40	懇親会 (18:20 受付開始)
18:40—18:55	美術教育学賞 授賞式

【2日目】2026年3月15日(日) 午前

★企業による出展 (14号館4階) : 9:00～ ★小野記念講堂ロビー受付開始9:00

<p>9:30-12:00 (大会企画)</p> <p>全日本美術教育会議</p> <p>ゲスト:小林 恭代 教科調査官 平田 朝一 教科調査官</p>	<p>【小野記念講堂】</p> <p>一般公開 (無料)</p> <p>■定員 200名 (入場者先着順)</p> <p>■200名を超えた場合は、別教室(14号館101教室予定)でのZoom配信をご視聴いただきます。</p>
<p>12:00-13:00 昼休憩 ※各教室並びに参加者控室, 校舎内, キャンパス内で食事可能</p>	

【2日目】2026年3月15日(日) 午後 ※[EN]は英語発表

午後 《研究発表》

	A会場 14号館4階 401室	B会場 14号館4階 402室	C会場 14号館4階 403室	D会場 14号館4階 407室	E会場 14号館4階 408室
① 13:00 13:30	幼児教育における「環境を通じた教育」の理念が、小学校教育(図画工作科)へどのように接続するか—領域「表現」と図画工作を繋ぐ教育観の変容に着目して— 服部 真也(奈良女子大学附属小学校), 浅野 卓司(桜花学園大学), 大塚 有佳(新潟大学附属長岡小学校)	メディアアート教育を特別なものにならないために—美術教育におけるテクノロジーと表現の再考— クリステーション リョウ(ノースカロライナ大学ウィルミントン校・アメリカ) [EN]	現代美術教育の未来展望:「終末住宅」に関する学際的カリキュラムの意味構築 林 ワンロン(新北市板橋区大観小学校、台湾) [EN]	特別支援学校(知的)における図画工作科及び美術科の鑑賞活動に関する全国調査 高橋 智子(静岡大学)	美術館での教員向けプログラムに関する一考察—国立西洋美術館での取り組みから— 秋田 美緒(国立西洋美術館)
② 13:35 14:05	ESD・PBLにおける絵本作りの美術教育的意義:物語的対話を通じた経験の構造化 松井 素子(愛知学泉大学)	視覚文化教育の視点を通じたビデオゲーム・リテラシー・カリキュラム設計に関する理論的枠組みの考察 Xin CHEN(ブリティッシュコロンビア大学・カナダ) [EN]	小学生の創造性育成:非階層的視覚芸術カリキュラム設計 王翊琳(国立台湾師範大学美術研究科芸術教育専攻) [EN]	肢体不自由のある子どもの美術科カリキュラム設計支援アプリの開発 森田 亮(明星大学)	美術館における婦人美術ボランティアとその意義について—北九州市立美術館と北海道立近代美術館の事例より— 中村 志映(奈良女子大学大学院人間文化総合科学研究科)
③ 14:10 14:40	未来を予見する工芸品:幼児向け先史時代の芸術 Andrea Land(ウィルソンスクール・アメリカ) [EN]	美術教育の未来像:高校生における生成型AIと共創学習の可能性を探る YU-LING,WU(国立台湾師範大学美術学部) [EN]	小学校美術授業におけるデジタル創造活動での仲間との関わり方 Annika Hensmann(ルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン、ドイツ) [EN]	できないことが自由をつくる—プログラミングアート学習としてのヘボン実践— 井上 昌樹(育英短期大学), 茂木 一司(跡見学園女子大学)	造形活動における保護者と子どものかかわりに関する研究—発話分析を通じて— 里村 亜呼(筑波大学人間総合科学学術院人間総合科学研究群芸術学学位プログラム博士後期課程)
④ 14:45 15:15	絵本のイラストを用いた幼児の資源保全意識の促進:日本の絵本『もったいないばあさん』と他4冊の絵本からの知見 蕭 慶元(元・国立大学教授(退職)) [EN]	児童の感情認識能力の向上におけるAI活用デジタル絵本の応用研究 鄧羽宸, 賴彦如, 蔣世寶(国立雲林科技大学、台湾) [EN]	児童期の描画の再創作に関する研究—創作的啓発および美的評価の構築への示唆— 楊 舒榮(国立台湾師範大学美術研究科芸術教育専攻) [EN]	美術科教育におけるインクルーシブ防災論に向けて—インドネシアにおける記憶継承のアートプロジェクト事例の報告— 梶原 千恵(宮城教育大学)	美術館教育普及スタッフと共同で行う授業カリキュラムの開発 今村 真帆(碧南市立東中学校)
⑤ 15:20 15:50	青少年のポジティブな感情に関する文章表現および絵本イメージ創作の表現を探究する 李奕萱(国立台湾師範大学美術学系) [EN]	写真と共に思考する:『フィルム・サイクル・プロジェクト』におけるAIを用いたCOIL型国際スベキュラティブ・ビジュアル探究 佐原 理(徳島大学), Aaron Kncochel(ペンシルベニア州立大学) [EN]	現代美術館の鑑賞ツアーにおける子どもの美術学習経験 鄭 黎穎(国立台湾師範大学美術学系、台湾) [EN]	教育機会確保法(2016)以降の美術教育の在り方 - フリースクール等での芸術体験における学びの価値 寛 有子(浜松学院大学)	大学生の美術館訪問に関する実態調査—地域の美術館との連携に向けて— 久保田 美和(敬愛大学)
⑥ 15:55 16:25	マカオの青少年のアイデンティティと絵本創作のナラティブ ワン・インミン(国立台湾師範大学 美術学系 博士課程) [EN]	実験学習法を導入した台湾の高級職業学校における専門科目「色彩原理」の教案設計に関する研究 蔣 世寶, 賴 彦如(国立雲林科技大学 視覚伝達デザイン学科)	ポスト・パンデミック期における美術館オンライン学習資源の変容—Getty CC0と国立台湾美術館を事例として— 林珈好(国立台湾師範大学) [EN]	創造主義を支えるシステムの顕在化—造形活動における偶然性からアブダクションへ— 小林 貴史(東京造形大学)	多様な学びの場における芸術体験活動の実態とニューズ—首都圏67の不登校支援施設への質問紙調査— 中村 仁美(和光大学)

⑦ 16:30 17:00	科目からツールへ美術教育の進化する風景の中で英語を再考する Sakay R. Oscar E. (筑波大学芸術系) [EN]	生成 AI を活用した鑑賞スキル可視化アプリの開発と検討 石崎 和宏 (筑波大学), 王文純 (美術教育)	生まれつきロービジョンの視覚障害者が美術館で経験することに関する探索的研究:台北市立美術館における台北ピエンナレを事例として 白壁 菱 (国立台湾師範大学美術系) [EN]	発達の視点における写実描画への移行期の分析:個人内の多様性に着目した創造性育成の可能性 大澤 和美 (ノートルダム清心女子大学大学院人間生活学研究科人間発達学専攻)	海外の浮世絵展覧会における教育普及活動の現状と課題—国際交流基金・JOIプログラムの事例から— 大久保 範子 (岡山大学)
	F会場 14号館5階 501室	G会場 14号館5階 502室	H会場 14号館5階 514室	I会場 14号館5階 515室	大会企画会場 14号館6階604室と校舎
① 13:00 13:30	中学校美術科のデザイン教育における、気づきのプロセスと向社会性 桐山 瞭子 (お茶の水女子大学附属中学校)	子どもたちと「墨」を旅する—探る愉しみと図画工作— 笹原 浩仁 (福岡教育大学), 坂元 勇生 (福岡教育大学附属福岡小学校)	毛筆画時代から教育的図画時代への過渡期における高等小学校図画科の実態をめぐる—考察 赤木 里香子 (岡山大学学術研究院 教育学域)	国民学校芸能科図画鑑賞指導用掛図《狩野元信筆 山水化鳥図》を活用した戦時下における対話的美術鑑賞教育実践 勅使河原 君江 (神戸大学人間発達環境学研究所)	空き
② 13:35 14:05	水のオノマトペ—絵の具と水を用いた制作過程は、オノマトペを媒介として音のイメージを視覚表現へとつなぐ契機となり得るのか— 友竹 晋太郎 (広島市立長束中学校)	子どもの問いから萌芽する図画工作科の授業実践とその可能性 (3) 社会との協働が促進する既習技能の活用と学びの拡張 粟津 謙吾 (成城学園初等学校)	戦前の秋田県小学校教員と地方画家「伊藤弥太」との関係性 長瀬 達也 (秋田大学大学院教育学研究科)	児童が自分の見方や感じ方を広げたり深めたりする題材開発 西尾 正寛 (畿央大学), 岡本 卓也 (御所市立披上小学校), 岡本 麻希子 (橿原市立耳成南小学校), 金石 考弘 (橿原市立鴨公小学校)	空き
③ 14:10 14:40	アートライティングにおける芸術認識の生成と転換—高校生アートライター大賞受賞作品の質的分析— 直江 俊雄 (筑波大学 芸術系)	駄菓子子の擬人化を通した子どもの興味拡張を促す学習支援システムの開発 石原 由貴 (徳島大学), 佐藤 美綾 (徳島大学)	戦前期教育掛図の図版研究—図画教科書・博物書との比較から 牧野 由理 (埼玉県立大学), 金子 一夫 (茨城大学名誉教授)	フィールドワークの視点を取り入れた中学校美術科鑑賞授業の実践報告 赤石 賢也 (群馬大学大学院教育学研究科授業高度化専攻)	
④ 14:45 15:15	人類の負の経験から記憶を引き継ぐ深い学びへ—体験させたくないことを実感させるための美術教育の可能性— 山田 猛 (東京造形大学), 馬場 務 (長崎市立西北小学校)	保育・幼児教育専攻の学生と取り組んだ対話型鑑賞 濱脇 みどり (東京学芸大学)	創造美術運動の歴史から何を学ぶか—創造美術運動に関する研究 (6)— 新井 哲夫 (群馬大学 名誉教授)	写真の中を旅する—水俣病啓発活動における対話型鑑賞の導入実践 安見 一葉 (大阪公立大学大学院)	(大会企画) メディアアーティスト×高校生=未来 開催時間: 14:00 ~16:00 佐々木 遊太氏 (メディアアーティスト) 石賀 直之 (東京造形大学)
⑤ 15:20 15:50	美術教育における限界的練習モデル構築と才能観・努力観の質的変容—形式的評価を媒介とした「創り出す学び」への転換— 長谷川 聡 (早稲田大学早稲田大学 大学院教育学研究科 博士後期課程)	教員養成大学における「森林ESD」の観点を取り入れた授業の試み 青木 宏子 (大阪教育大学 非常勤講師)	図画教員と美術ジャーナリズム—「文検図画科」受験者の図画学びの諸相から— 亀澤朋恵 (高田短期大学)	鑑賞行為により幼児の自己が形成される対話の研究 大平修也 (岡山大学), 松本 健義 (上越教育大学名誉教授)	
⑥ 15:55 16:25	描画材料の自己決定の状況が表現活動に与える影響についての研究 溝上 怜海 (岡山大学 大学院教育学研究科 教育学専攻)	図画工作科の継続した授業研究における教員の学びと学校研究についての意識 吉田 岳雄 (横浜市立霧が丘義務教育学校)	中学校美術科学習指導要領の自己言及特性—音楽科学習指導要領との比較を通して— 有田 洋子 (鳥根大学)	日本絵画鑑賞における評価視点の性差—琳派作品を中心に— 新川 美湖 (東京芸術大学 専門研究員)	空き
⑦ 16:30 17:00	美術教育と芸術実践者の相互作用に関する試論—題材としての裸婦画を手がかりに— 石田 翔太 (大分大学), 厚地 朋子 (京都市立美術工芸高等学校)	保育者志望生の包括的表現を如何に促すか—大学美術教員の立場から— 三上 慧 (東洋英和女学院大学)	戦後美術教育史の試み 1—昭和33年告示学習指導要領の成立過程— 金子 一夫 (元・茨城大学)	美術を見ることと「対話」 石川 誠 (京都教育大学 名誉教授)	空き

リサーチフォーラム in 大阪2 Research Forum in Osaka 2

造形遊びの再布置化に向けて

北野 諒 (高知大学)・清家 颯 (東京学芸大学)

1. はじめに

2025 年 12 月 20 日、上記フォーラムの開催が無事終了いたしました。ご参会・ご助力いただいた関係者のみなさまに、篤く御礼を申し上げます。事前に周知していた内容から、登壇者の発表題目変更などもあったため、あらためて下記の通り概要を報告・記録いたします。

[お詫び] 本フォーラムの告知文 (美術科教育学会通信 No.120, p.20) にて「本フォーラムは、金子一夫氏企画・前期リサーチフォーラム (2025 年 7 月 12 日 同会場で実施) と“戦後美術教育”を結節環とした連動企画である」と記載しておりましたが、正しくは「有田洋子氏・金子一夫氏企画」でございました。ご関係のみなさまにお詫び申し上げますとともに、ここに訂正をいたします。

- フォーラム名 造形遊びの再布置化に向けて
- 日時・場所 2025 年 12 月 20 日 サクラクレパス本社 4F 研修室
- 参加者数 対面参加 24 名 配信参加 56 名

* Peatix 上の申込数を基準に算定。当日に出欠の変動があったため参加実数は正確に把握できず。

■登壇者と発表題目

基調提案	
永守基樹 (和歌山大学名誉教授)	「造形遊びの再布置化に向けて」の論議を前に
第Ⅰ部	
金子一夫 (茨城大学名誉教授・特命研究員)	消費社会・虚構の時代に発生した造形遊び —前期フォーラムとの関連— 造形遊びの制度的出発と展開 —西野範夫から板良敷敏への推移—
清家颯 (東京学芸大学特任講師)	基礎なるものへ閉ざし、歴史意識のなかに開かれる ——永守基樹「造形遊びの再布置化」論批評
第Ⅱ部	
鷹木朗 (京都芸術大学特任教授)	60-70 年代アートの題材化・実践事例：造形遊びの再構成 —[身体-自然]のフィールドから[人間-社会]のフィールドへと展開する基礎教育—
北野諒 (高知大学講師)	参加型アートの題材化・実践事例：造形遊びの拡張 ——関係遊びとしての造形遊び
菊地虹 (立教大学博士後期課程)	ABR とリフレクション：造形遊びの新たな学習モデル —「箱庭的フレーム」の提案—

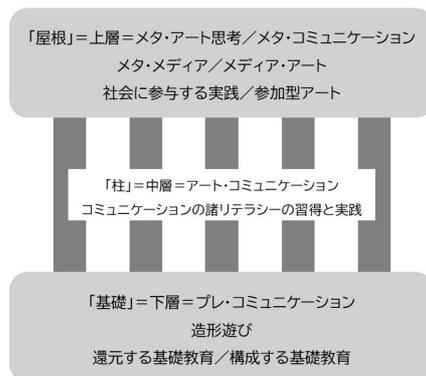
* 当日配信の技術サポートとして辻大地氏 (子どもアートスタジオ主宰) にご協力いただきました。また、辻氏には『発表概要集』(pp.26-28) に「本論説の核心を、現行の図画工作科・美術科の教育課程と比較する」と題した書評をお寄せいただきました。

■記録写真



2. フォーラムでの議論について

当日の発表順に沿いながら、ごく簡潔にはなりますが、議論の内容についても報告いたします。まず前提を振り返れば、本フォーラムは永守氏による論考「造形遊びの再布置化に向けて」を契機に企画されたものでした。基調提案では、氏自身から論考の企図・問題意識が共有され、フォーラム全体の議論に一定の方向性を与えるものとなりました。「造形遊びは図画工作科・美術科教育の『基礎教育』として教育課程に位置づけられるべきである」という主張を核としつつ、歴史的・文化的背景を高密度で編み直していく当該論考をここで要約しきることとは叶いませんが、氏が提案する教育課程の原型的モデル図を、巨視的な議論の地図として転載しておきます。



第Ⅰ部前半の金子一夫氏の発表では、通念的戦後像を批判的に再解釈する前期フォーラムでの議論を踏まえつつ、大局的な時期区分から「造形遊びは戦後後期・消費社会・虚構の時代に発生したものである」との指摘がなされました。そこから、制度的観点へ議論は展開し、教科調査官・視学官であった西野範夫・板良敷敏両氏の思想背景および造形遊び観が析出され、その相違に照明が当てられました。金子氏の議論は、通念として語られてきた従前の歴史観（造形遊び概念といったミクロな事象も含め）とは異なる把握可能性を提示するものでした。

第Ⅰ部後半の清家の発表では、永守氏の論説を内在的な仕方で批評し、造形遊びを「再布置化」の舞台装置である「教育課程（カリキュラム）」において把握する意味と、歴史的コンテクストのもとで語られた「閉ざされ」の二重性について検討しました。永守氏の重層的な構想は、モノ（object, thing）、メディア（media）、記号（sign）等といった語彙に支えられています。そのなかでも、とりわけ美術教育研究における「メディア」概念については、美術教育が提供すべき「教育的なるもの」すなわち、造形遊びの根拠である「世界との出会い」に即した語りと語り直しの可能性に照らし、再整理を要する点に言及しました。

第Ⅱ部は、実践的提案と称したものの、「実践-理論」論議に汲み尽くされないかたちでの提案がなされていました。鷹木朗氏の発表では、60-70年代のアートを参照項としつつ、80年代以降の芸術実践の展開をも踏まえた「京都インターアクト美術学校」での美術教育の実践・カリキュラムが紹介されました。永守論考の展開を示す先行事例として、モダニズム美術教育の最終形態である造形遊びから、いかに他者や社会とのインタラクションを経て「表現」（上図で言えば柱=中層）を形成・獲得していくのかについて、重要な示唆を与えるものでした。

また北野の発表では、上図にてロールモデルとして提示された「参加型アート」の題材化について、いくつかの実践事例を論じました。特に「上層」における「社会に参与する実践」を目標として「造形遊び」の関係論的側面を拡張した「関係遊び」と呼称する実践を、本フォーラムの議論におけるクリティカルな事例として示しました。なお、関係遊びの方法論としては、フレーミング（モノの対象化・異化）と、ルールメイキング（モノとの関わり方の制作）の2点を仮説的に提議しています。

第Ⅱ部最後の菊地虹氏の発表は、造形遊び実践を眼差すための学習モデルを提案するものでありました。D. ショーン（Donald Alan Schön）の「リフレクション」（reflection）概念、および「ABR」（Arts-Based Research）の基盤としての「教育的鑑識眼」を導入しつつ、氏は「箱庭的フレーム」を提唱します。枠組みを設けることで「自由」に教育的限定を施し、「安全な逸脱」という両義的な様態を教師の導きのもとに活動へ埋め込み、リフレクションと教育批評で学びを判断・評価する……といった氏の構想は、造形遊びの実践（あるいは、そこでの教師の指導）に「反証可能な（=検証可能な）」足場を立ち上げる試みであった、と捉えられるでしょう。

以上、議論の詳細については割愛せざるを得ず、ディスカッションの場面などでご参加の方々からいただいた貴重なご意見についても紹介が叶わないこと、ご海容ください。今後、本稿とは別に、本フォーラム報告書の作成を計画しており、そこでフォローアップができればと考えております。加えて、永守氏の論考については書籍化のうえ、2026年3月に学術研究出版より刊行が予定されています。引き続き、造形遊びをめぐる闊達な議論と、実りある実践に向けての取り組みを続けてまいります。広くご協力をいただけますと幸甚です。

書評 Book Review

著者：美術教育学叢書企画編集委員会 直江俊雄責任編集，発行：学術研究出版，2025年1月31日発行，ISBN：978-4-911008-34-8

美術教育学叢書 4 美術教育学 私の実践技法

大島賢一（信州大学）

2018年に『美術教育学の現在から』を第1号として刊行されて以来、継続して刊行されている美術教育学叢書の4冊目として2025年に刊行された本書は、先の第3号『私の研究技法』に引き続き、直江俊雄の責任編集による。『私の実践技法』と題され、直江の他、11名の寄稿と、2021年、大泉義一によって開催された美術科教育学会リサーチフォーラムにおける秋田喜代美の講演と、サミア・エルシェイク、グレン・クーツという国際美術教育学会（InSEA）でも中心的役割を果たしてきた美術教育者へのインタビューにより構成されている。本書の著者の多くは、いわゆる高等教育機関の美術教員養成に携わるものたちである。しかし、本書で紹介される「実践」は、大学における教員養成実践に関するものに限らず（むしろ、それらは少数派であり）、小学校、中学校、高校での教育実践から、美術館との連携事業、幼稚園や小学校の放課後に実施される造形絵画教室、アートプロジェクトなどと多岐にわたる。

本書に冠された「技法」という言葉について、直江は次のように述べている。

『美術教育学 私の実践技法』のタイトルに用いた「技法」の語は、美術の表現技法や、教師による授業の効果的な指導法などを連想させるかもしれない。しかし、その本意は、英文タイトル *The Art of My Teaching in Art Education* にも示したように、私の美術教育実践における Art（芸術としての技法）、すなわち教育実践における芸術的行為の本質はどこにあるのか、という問いかけにある¹。

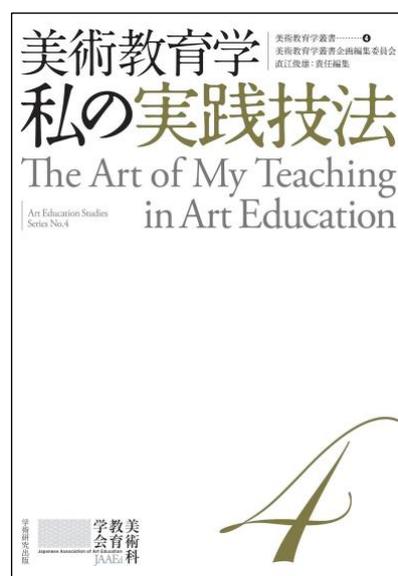
つまり直江は、教育実践とは芸術である、という主張をなそうとしており、本書に掲載された実践について、それらを芸術的行為として読むことを求める。

この際、直江がその論理的背景に置くのは、ハーバート・リード（および、小野二郎一宮協理）による、芸術を具体的な作品によって形象されるものとしてではなく、創造的営為として生きることそのものとして理解しようとする思想と、そこから敷衍される、教育的営為と芸術創造過程を融合一致しようとする思想である。

直江もすぐさま指摘するように、こうした主張というのはリードによって初めてなされたものでもなければ、唯一なされたものでもない。芸術というのを創造的行為と捉え、あらゆる人間的行為、中でもとりわけ、人を育成する教育という営為の創造性を芸術に準える論というのは、普遍的なアナロジーともいえよう。

例えば、教育学者大田堯は、石川啄木の「最高の教育は芸術である」という言葉を引きながら「教育はアート」であると喝破する²。この大田による「教育はアート」という言葉は、美しく魅力的な響きを有するものであるが、実のところ、その本意というのは著作の中で明言されているわけではなく、どうにも曖昧さを有している。なるほど、鳥が卵から孵化するとき、殻の中から雛がつつく音（啐）と、親鳥が外から殻をつつくこと（啄）が同時になされる様という「啐啄同時」という言葉や、ピーター・レイノルズの絵本、『てん』における教師の関わり方、自由の森学園などを事例として語られることから、教育は一方的に押し付ける機械的なものではなく、被教育者の状況につぶさに応じ、響き合いながらなされる、それ自体ユニークな「わざ、創造的な仕事」であると言わんとしているのであろうということは窺える。一方で、そのロマンティックな曖昧さから、教育という仕事の素晴らしさ、意義深さと同時に、何だかケムに巻かれているような、強引に説得されているような感じも受ける。それは、アートという言葉の曖昧さに由来するのだろう。さらに、穿った見方であるかもしれないが、教育というのを必ずしも誰しもがなしえるわけではない秘技的な、天才的技芸のように感じさせる側面もあるように思う。

教育を芸術になぞらえることへの、一定の躊躇というのを直江は率直に次のように述べる。



しかしながら、私たちの教育実践を「芸術的行為」であると自ら呼ぶことには、いくらか躊躇する気持ちが生じるというのが、正直なところではないだろうか、その一因を考えてみると、「芸術的」という言葉の中には、一般的には「芸術的と言えるほど、独創的で美しく優れている」、場合によっては「天才的な芸術家の為せる完璧で超絶的な技」というような、並外れた高評価の意味を含んでしまうからではないかとも思う³。

ところで、この大田による「教育はアート」という言葉に触発され、美術家の西尾美也は『美術は教育』⁴というインタビュー集を刊行している。このインタビュー集は、「芸術実践に携わる表現者やキュレーター、アートマネージャー、コーディネーター」へ「美術」と「教育」をテーマとしてなされたインタビュー調査の記録であり、西尾によると「大田の主張に同意しながら、アートの側から『美術は教育』と応答」⁵するものであるとされる。こうした著作が編まれる背景には、アートの側における「教育的転回 (Educational Turn)」という傾向がある。アートプロジェクトなど、完成作品を鑑賞する営みではなく、作品の制作過程への参加を求め、社会のさまざまな問題に切り込む実践となっていた近年の芸術は、その過程において、市民への教育機会という側面を強調していった。また、それに呼応するように、美術館や展覧会などのキュレーションの場面においても、「教育」は単なる関連プログラムではなく、展覧会や作品の形式そのものに関わる本質的なものとなった。例えば、近年の美術館やトリエンナーレなどの芸術祭における「ラーニング」への傾注というのも、そうした転回の現れと捉えることができるだろう。このように、実はアートの側も「教育」へと近接しようとしている状況が伺える。

「美術は教育」とする西尾であるが、その端々からは、教育という言葉のすわりの悪さというの伺える。例えば、小山田徹（2025年より京都市立芸術大学学長）と藤浩志（秋田公立美術大学教授）へのインタビューの冒頭、次のように述べる。

西尾 「美術は教育」というと、ちょっと上から目線な感じがしますが、学び合いというキーワードに近い言葉として使っています⁶。

西尾自身、東京藝術大学の准教授であり、インタビューもまた、美術大学の教員でもあるにも関わらず、「教育」という言葉を用いることに、なお一定のためらいがあることが伺える。

教育者の側がアート（美術）に教育をなぞらえるとき、それは、従来の教育とは異なる、一種秘技的で天才的な「わざ、創造的な仕事」とされ、一方、美術家の側が、美術（アート）を教育へとなぞらえようとする「上から目線」な感じがするとされる。いずれにしても、従来の「フォーマル」な教育イメージを打破する何事か、というのがアート＝美術には期待されるのだろう。

さて、そうすると、「美術教育者」はどのように教育実践と美術を論じるのだろうか。そこにある、ある種の機微こそが、美術科教育学会による美術教育叢書の第4号として編まれた『私の実践技法』において読み取れるものではないだろうか。

この機微というのは、どのように美術教育者の多くが育成されるかということに、一つの由来があるように思う。本書の読みどころの一つとして、寄稿している実践者の多くが、いかにして自身がその実践に辿り着いたか、というライフヒストリーを、おそらく編集者からの要請であろうが、赤裸々に語る部分がある。個人的な経験とも重なるのだが、多くの美術教育実践者というのは、過去において自ら美術家を志向した、あるいは現状においても教育と並行して美術家であるという点に特徴があることがわかる。そうしてみると、本書における教育実践は、美術を選択し得たものたちが、美術という行為が持つ以上の創造性や可能性を期待して「美術」ではなく「美術の教育」へと至ったものとして読むことができる。そうした態度というのは、大田のものとも、西尾のものとも、いささか異なる視座を提供するよう見える。

さて、直江は、その原稿の最後を、「芸術的行為ではない美術の教育実践もまた、ありうるのである」⁷と締める。では、本書に寄せられた美術教育実践が、いかに芸術的行為であるかということは、読者それぞれによって確かめられたい。

¹直江俊雄「はじめに」美術教育学会叢書企画編集委員会編『美術教育学 私の実践技法』学術研究出版、2025、p.6.

²大田堯『大田堯自撰集成生きることは学ぶこと 教育はアート』藤原書房、2013

³直江、前掲、p.35.

⁴西尾美成『美術は教育』現代企画室、2024

⁵同、p.4.

⁶同、p.374.

⁷直江、前掲、p.36.

美術教育学叢書 5 美術教育 授業の現在

藤田雅也（岡山大学学術研究院教育学域教授）

本書は、現代の日本における美術教育の授業実践と理論的思考を架橋し、その到達点と課題を多角的に提示する論集である。本書は、美術科教育学会が刊行する叢書の第5号であり、従来の美術教育研究書とは一線を画し、実際の授業（保育）実践に焦点を当て、実践者の視点から「授業の現在」が語られている。

これまでの叢書は、美術教育学の「現在から」（第1号）、「歴史から」（第2号）、「私の研究技法」（第3号）、「私の実践技法」（第4号）というテーマで、美術教育研究を広範かつ実践的に捉え、美術教育学の研究者の視点からの論考が整理されてきた。第5号となる「授業の現在」では、第1号から第4号にかけて蓄積されてきた問題意識と方法論を継承しつつ、近年の教育改革や社会状況の変化を踏まえながら、美術教育における「授業の現在」をあらためて問い直す試みとなっている。

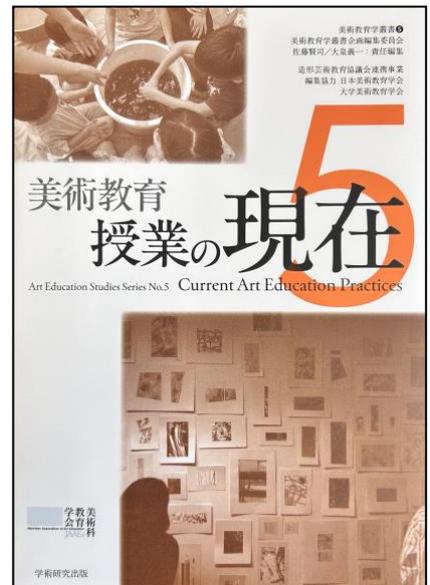
美術教育学叢書として「授業の現在」に焦点を当てた理由について、企画編集委員長である佐藤賢司氏（大阪教育大学大学院 連合教職実践研究科 教授）は、実践者が自らの言葉で実践を語り、実践者自身が「実践の中で見ている風景＝見ようとしている風景」（p. 243）や、こどもの姿が見える本をつくりたかったと述べている。従来からの学年や校種ごとの区分けや、表現領域で題材を分けるのではなく、実践者がその実践に込めた「願い」や「意味」を基に、本書では7つの視点として再構築し提案している。

本シリーズは一貫して、「美術教育とは何か」という理念的問いを、抽象的な教育理論に回収するのではなく、具体的な授業実践の記録と分析を通して思考する姿勢を貫いてきた。その特徴は、とりわけ本書においてより一層明確である。学習指導要領や制度論を起点とするのではなく、教室という場において実際に起こっている出来事、教師と学習者のやりとり、課題設定や教材の選択といった実際の授業の現実が起点となって、その「風景」が丁寧に描かれている。

さて、前述した7つの視点によって整理された各章の扉には、実践者や研究者の思いを端的かつ核心的に捉えたリード文が添えられている。リード文の最後には、いずれも「……そんな実践」と示されており、読者に開かれた提案として投げかけられている。

< 7つの視点に基づく各章の構成とリード文 >

1. “世界”を知る : 描くことやつくること―表すことを通して、自らが接する“世界”を知る
2. “形”が生まれる : 行為や思考が、既知の世界を超えた未知なる“形”や意味の生成を表現する
3. “私”を可視化する : “私”を表す・“私”が現れる表現…… “私”の輪郭を表す言葉が生まれる鑑賞……
4. “みる”を深める : 対象を“みる”ことが、今よりさらに深まる、そして世界の見方が変わる
5. “誰か”を思う : 身近な誰か、遠くの誰かへの思いが造形の動機となる……; 作品をみることで、作者への思いへとつながる
6. “境界”を超える : 図工・美術という教科の枠組みを超えて新たな思考が生まれる
7. “社会”をつくる : 自分たちが所属するコミュニティやこれからの社会を、美術の力でよりよくしていく



上記に示す各章の構成は、各論考を分類するためのものではなく、まさに「授業の現在」として、美術教育の実践の価値や、教育の営みそのものを研究の対象とした美術教育学の本質について考えていくための、「今日的な視点」としても捉えることができよう。

本書には、幼稚園やこども園における保育実践、小中学校や高等学校における授業実践、大学や美術館との連携による実践など、あわせて54件の実践に基づいた論考が収録されている。本書の魅力は、これらの実践が、題材の紹介にとどまった、いわゆる題材集として構成することを企図していない点にある。

それゆえに、どの章からでも読み進めていくことができ、54の「風景」を、読者の興味や関心によって旅することができる。また、54の「風景」を巡っていく前に、まずもって読んでいただきたいのは、巻頭言と、巻末の対談である。

巻頭言「授業実践の『今』を」には、佐藤氏によって本書に込められた願いと企画の趣旨が綴られている。佐藤氏は、「美術教育学は、教育の営みそのものが研究対象であり、日々の実践と切り離しては成り立たないものでもある」(p. 8)と述べた上で、「それらの実践が、美術教育をめぐる哲学や、これまでの研究成果とどのように関連しているのかを見ていくことが重要であり、未来への研究へとつながるのである」(p. 8)として、美術教育の実践を共有することによって、新たな価値や意味を生み出していくことの重要性を提起している。

本書に収録される54件の実践は、<題材名>、<活動の概要>、<(各カテゴリーの)ポイント>、<展開モデル>、<ノート>、<材料・用具>、<実践・思考のヒント>の項目について、それぞれ計4ページの見開きで構成されている。<ノート>には、実践者がこどもたちに向けた願いや授業に込められた思想が整理されている。また、各実践の末尾には、それぞれの<実践・思考のヒント>として、実践者からの簡潔な一言のメッセージが示され、実践者が参考にした先行研究や文献が紹介されている。それぞれの実践が持つ美術教育学に根差した背景を深く理解できる構成となっており、実践例の紹介に留まることなく、その根底にある実践者の思考や研究の視点に触れることができよう。

対談では、本書の企画を提案し責任編集として統括している佐藤氏と大泉義一氏(早稲田大学 教育・総合科学 学術院 教授)が、「授業・実践を語ること、そして共有すること—をめぐって」というテーマを取り上げ、本書を構想した背景や、美術教育の現在における「実践をみる視点」などについて語っている。大泉氏は、本書で対象としている「授業」とは、保育も含めた何らかの教育的な実践(practices)であると述べており、「こどもと教師の間で起こるあらゆる出来事における意味や価値とその解釈」(p. 241)であると提起している。美術教育実践は、まさに、「こどもと教師による創造的な営み」(p. 244)であり、教師には目の前のこどもの姿をみる力が多分に求められよう。佐藤氏は、「実践をみる視点」のことを「フレーム」という言葉で表現している。その上で、「誰かに与えられた見方ではなく、他でもない自分自身の見方で実践を捉えようとする」と(p. 247)によって、実践をみるフレームを変えることができると指摘している。本書で提起された視点やフレームが起点となって、読者の価値観や理念に基づきながら、さらなる議論が創出されていくことによって、「他者と実践を語り合う契機」(p. 246)が生まれ、美術教育の新たな視角が開けていくであろう。

なお、本書の企画と編纂は、造形芸術教育協議会(美術科教育学会・日本美術教育学会・大学美術教育学会の三学会による協議会)の連携事業としても位置付けられている。美術科教育学会にて構成された「美術教育学叢書企画編集委員会」が本書の企画や全体構成などの責任編集を行い、日本美術教育学会と大学美術教育学会が編集協力として参画している。54件の実践の執筆者および実践者は、三学会の会員の中から推挙されており、所属学会を超えて、今という「現在」において互いに共有し合いたい美術教育の授業が本書に集結していると言えよう。

世界中を震撼させた新型コロナウイルス感染症の蔓延は、人と人のつながりを断絶させ、個々の身体に深く根差した美術教育の在り方や、身体を介した表現活動の本質について問い直す転換期としての時代を迎えた。また、ICT化の急速な進展は、学校教育にも大きな影響を与えている。多様な側面から美術教育を研究する三学会にとって、今現在のリアルな授業実践の現実を共有することはきわめて重要であり、その実践の現実とは、必ずしも現行の学習指導要領などの言葉をもって代替できるものではないだろう。

「授業の現在」というタイトルが示すとおり、時代や社会が変化し、目の前にいるこどもたちが変われば、美術教育の実践も、現在に留まることなく、変化し続けていくであろう。本書が示す、美術教育の実践の意味や価値、カテゴリーは、今の時代における提案であり、実践に対する捉え方や考え方の違いに気づき、他者と実践を語り合う契機になると言えよう。本書が描き出す「授業の現在」は、決して完成されたモデルではない。それは、常に揺れ動き、試行錯誤を続ける過程として提示されている。その不確かさを引き受けつつ、なお授業を創造し続けようとする姿勢こそが、本書、ひいては本シリーズの核心であると言えるだろう。過去の実践を批判的に継承しながら、これからの美術教育を構想するための確かな思考の土台を提起する一冊であり、今後の美術教育の研究と実践に長く参照されるべき書籍である。

■ 総会委任状の電子化と提出について

2025年度の総会は、委任状が電子化され、その受付は、すべて本部事務局支局のシステムを用いて行われます。本通信・2ページでもご案内いたしましたが、以下に委任状の提出方法等概要をご説明いたします。この委任状の電子化とご提出につきましては、学会HP、一斉配信メールでもご案内いたします。なお、回答期間にご注意ください（総会に出席の場合は提出不要）。

- ・回答受付期間：2026年2月20日（金）10時～3月6日（金）17時（なお、賛助会員の方は、ログインされても案件が表示されません）。

<委任状の提出方法>

- ① 下の URL より、「調査管理・認証画面」にアクセスする。ご自身のIDとパスワードでログイン可能です。会員IDとパスワードをご入力後、「ログイン」。
<https://service.gakkai.ne.jp/society-member/auth/survey/AE>
- ② ログイン後、「2025年度総会委任状」をクリックします。
- ③ 「ご欠席」にチェックを入れ、代理人を選択します。代理人は代表理事を選択して下さい（その他〔出席者〕も選択できます）。連絡事項がありましたらご記入後、送信内容の確認、ログアウトと進みます。

■ 会費納入をお願いします

3月の大会、リサーチフォーラム、学会誌刊行などの学会運営は、会員の皆様の会費により運営されています。ご自分の各年度の年会費納入状況については、以下の「会員情報管理システム」にログインすることにより確認が可能です。

<https://service.gakkai.ne.jp/society-member/auth/AE>

なお、納入状況に疑問がある場合には、下記の本部事務局支局の窓口アドレスにお問い合わせ下さい。

留意事項

学会誌への投稿並びに大会での口頭発表に際しては、投稿や申込みの時点で以下の2つの条件を満たしている必要があります。

- ① 会員登録をしていること
- ② 当該年度までの年会費を全て納入済みであること。
* 会費を2年間滞納した場合は、会員資格を失います。

【会費納入に関するお問い合わせ先】

(株)ガリレオ 学会業務情報化センター 担当 和久津君子
[窓口アドレス] g030aee-mng@ml.gakkai.ne.jp

■ 会費振り込み口座名・番号

会員の皆様に送付される振込用紙、郵便局にある払込用紙または銀行等からの振替により下記の口座に納入してください。

- ・銀行名：ゆうちょ銀行
- ・口座記号番号：00140-9-551193
- ・口座名称：美術科教育学会 本部事務局支局

通信欄には、「2026会計年度会費」等、会費の年度および会員ID番号を記入してください。また、ゆうちょ銀行以外の銀行からの振込の受取口座として利用される場合は、下記内容を指定してください。

- ・店名(店番)：〇一九(ゼロイチキユウ)店(019)
- ・預金種目：当座・口座番号：0551193

年会費のクレジットカード決済サービスを開始しました

- ・決済手数料は学会が負担いたします
- ・学会WEBサイト (<https://www.artedu.jp/jaaed>) から決済画面に移動することができます

■ 住所・所属等変更、退会手続き

住所、所属先等に変更のあった方は、すみやかに本部事務局支局までご連絡ください。

退会を希望される場合は、電子メールではなく、必ず文書（退会希望日を明記してください）を郵送にて、本部事務局支局宛にお送りください。あわせて、在籍最終年度までの会費納入完了をお願いします。

美術科教育学会 本部事務局支局

〒170-0013 東京都豊島区東池袋2丁目39-2-401

(株)ガリレオ 学会業務情報化センター 担当 和久津君子

[窓口アドレス] g030aee-mng@ml.gakkai.ne.jp

■ 学会誌第47号に投稿され、掲載負担金について公費払いを予定している会員の皆様へ

学会誌第47号に投稿された会員で、掲載が許可された後、掲載負担金について公費払いを予定している会員の皆様にお知らせします。公費払いとは、大学研究費や科学研究費補助金などで支払うことをさしています。掲載負担金は、掲載ページ数が確定した時点（3月初旬を予定）で請求します。本部事務局支局からの請求書にしたがってお振込みください。ただし、各所属先が求める形式で請求書類を別途用意しなくてはならない場合は、そこから本部事務局支局と相談・交渉し始めたのでは、手続きが間にあわないことがあります。以下の留意点を読み、各所属先で前もってご確認いただき、相談・交渉するなど今から準備を始めて下さい。

留意事項

1. 原則として、必要な書類は、投稿者自身で作成いただき、書類等に捺印が必要な場合は、本部事務局支局までお送りください。作成いただく書類は、本部事務局支局からの「振込負担金請求書」以外の書類全てとなります。また、送付前に事前に以下までご連絡下さい。
2. 投稿者自身による「立替払い」を原則と致します。
3. 上記1、2を原則としますが、大学事務局と本部事務局支局が直接やり取りをしなければいけないケースがあります。この場合には、本部事務局支局まで、手続きの概要、事務担当者の連絡先などをメールで知らせて下さい。

■ 一斉配信メール

年3回刊行される学会通信が公開された際に一斉配信メールにてお知らせします。g030aee-galileo@ml.gakkai.ne.jp より配信しますので、受信できるよう設定を再確認いただきますようお願いいたします。

(以上)

美術科教育学会 本部事務局
Secretary Office
Japanese Association of Art Education



- 〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1 大阪教育大学
佐藤賢司 (代表理事/教科教育学コンソーシアム理事) ksato@cc.osaka-kyoiku.ac.jp
渡邊美香 (本部事務局理事/会員名簿) mwatanab@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

- 〒630-8528 奈良県奈良市高畑町 奈良教育大学
竹内晋平 (総務担当副代表理事/本部事務局長/庶務・会計・規約) shimpei@cc.nara-edu.ac.jp

- 〒338-8570 埼玉県さいたま市桜区下大久保255 埼玉大学
内田裕子 (本部事務局理事/会計・会費管理) yuchida@mail.saitama-u.ac.jp

- 〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37 明治学院大学
手塚千尋 (本部事務局理事/学会ウェブサイト) tetsuka@psy.meijigakuin.ac.jp

- 〒036-8560 青森県弘前市文京町1 弘前大学
佐藤絵里子 (本部事務局理事/学会通信) eriko0220@hirosaki-u.ac.jp

- 〒739-8524 広島県東広島市鏡山1-1-1 広島大学
池田吏志 (研究担当副代表理事/学会誌編集委員長) ikedas@hiroshima-u.ac.jp

- 〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1丁目6-1 早稲田大学
大泉義一 (事業担当副代表理事/リサーチフォーラム統括/8団体連携会議) oizumi@waseda.jp

- 美術科教育学会 本部事務局 支局
- (株) ガリレオ (<https://www.galileo.co.jp/>) 学会業務情報化センター
〒170-0013 東京都豊島区東池袋2丁目39-2-401
(担当者 和久津君子) TEL 03-5981-9824 FAX 03-5981-9852 E-mail g030aae-mng@ml.gakkai.ne.jp